慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツにおける日本学の現況
Sub Title	The present situation of the study on Japan in Germany
Author	牧野, 信也(Makino, Shinya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.32, No.4 (1960. 4) ,p.83(473)- 89(479)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19600400-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツにおける日本学の現況

牧野信也

ドイツ各地に散在する諸大學の日本學研究者について先づのべて行くならば、ヨーロッパの大學では日本學の講座は、普通、東洋學研究室の一部門として支那學と並んで置かれているが、西ドイツにおいて傳統があり、整っている研究室としては先づハンブルク大學のそれが擧げられる。

ハンブルクには正教授としてオスカー・ベンル教授が居り、歴史、文學、藝能などの分野にまたがる廣汎な研究を進めている。その論著の一部をあげるならば、

中國における道元（ドイツ東亞研究會紀要七九／八十）

源氏物語に於ける運命觀（ドイツ東亞研究會紀要七七）

世阿彌と能の精神（單行本　一九五二年）

日本における歌論の發展（單行本　一九五一年）

等がある。定員外教授としては、若いG・ヴェンク教授がその任にある。彼は新進の日本語學者として注目されており、三卷よりなる大著「日本語音聲學」を一九五四年より年を追って出した外、

日本語の活用の起源と組織化（ドイツ東亞研究會紀要七六號）

等日本語文法學に關する論文を多く發表して居る。更に助手としてG・S・ドンブラディ氏が居り、彼は後述するミュンヘンのハミッチ教授の弟子で俳句に關する研究等を出している。

尚、現在は正教授の任にはないが、我國に戰前から知られているW・グンデルト博士はここの名譽教授として健在で、最近は碧巖錄に關する研究をすすめている。

次に南ドイツのミュンヘンでは、若い頃日本で教鞭をとり、戰前はライプチヒの教授であったH・ハミッチ教授が正教授の任にある。多くの論文を發表しているが、殊に連歌や芭蕉を中心とする俳句の研究に造詣深い。そ

の二三をあげれば、

芭蕉の俳論に關する一試論　（雑誌「極東」一九五四）

連歌・俳諧の史的考察　（雑誌「極東」　）

日本藝能における「道」の概念　（ドイツ東亜研究會紀要八二號）

そのほかミュンヘンの研究室にはW・ナウマンという若い人がいてハミッチ教授の下で近世文學の研究をすすめている。

東ベルリンのフンボルト大學では、多年我國にいたM・ラミンク教授が歴史、經濟史、文學等多岐にわたる研究をしており、

日本人の由來の問題　（ドイツ東洋學會雑誌九五）

維新前日本社會の構成　（ドイツ東洋學會雑誌八二）

黄表紙の文學的側面　（ドイツ東洋學會雑誌八四）

等の論文のほか、

德川時代の浪人の問題　一九五六年

という著書もある。同大學のツァヘルト教授は西鶴に關する研究などをしている。例えば

西鶴と德川期の文學の發展　（雑誌「アジア研究」）

又講師としてのJ・ベルント氏は現代文學に關心をよせている。

次に、留學中助手として務める機會を得たミュンスター大學では、若い講師B・レヴィーン氏が、主として古代の文學、歴史、言語に關する研究をすすめている。例えば、

古代日本語における動詞の態（アスペクト）について（雑誌「極東」）

又同大學言語學科正教授P・ハルトマン博士は、最近の構造主義言語學の立場から日本語の諸問題を見、獨創的にして且、非常に興味深い著書がある。

日本語の言語構造の特長　一九五二年

ボンにはO・カロウ教授が居る。同教授は日本の醫學史に興味をよせている。

ハイデルベルクのゼッケル教授はケルンのシュパイザー教授と並んで極東、殊に日本美術史の專門家で、能面に關する一考察　（スイス月刊雑誌DU）

切金—金細工の一手法—の技術と歴史（雑誌「極東」）

ケルンではシュパイザー教授が日本美術史を講ずる外支那學專攻のデボン講師が日本語をも教えている。

アーヘン工科大學のエルトベルク・コンステン教授は日本美術史、殊に建築史を專門とし、

日本建築の傳統と技法（雑誌「テヒニッシェ・ミッテル」）

等の論文がある。

次に戰後から最近にいたるまでのドイツの日本學關係文献を各分野毎に分類、整理してみると次の如くである。

歴史

徳川時代の浪人の問題　M・ラミンク（一九五六年單行本三二頁）

維新前日本社會の構造　M・ラミンク（ドイツ東洋學會雑誌八二卷）

日本人の由來の問題　M・ラミンク（ドイツ東洋學會雑誌九五卷）

日本の十一世紀より十四世紀までの歴史記述　G・ロビンソン（雑誌「セクルム」一九五七年）

ロシヤ古文書における日本に關する最初の記事　B・レヴィーン（雑誌「極東」）

日本と千六百年代のシャム商人　W・ロェール（ドイツ極東研究會紀要）

源實朝　O・ベンル（雑誌「極東」）

天皇に關する考えの變遷について　W・グンデルト（ドイツ東洋學會雑誌九六）

百年前の日本　W・グンデルト

室町時代武家社會の構造　M・フォン・オイケン（ハンブルク大學ドクトル論文）

近世日本思潮　J・タウレン（雑誌「ノイエ・フルヒテ」）

三様の日本—大改・明治・昭和—　C・クーダンオーヴ（雑誌「アトランティス」一九五二）

一五世紀における日本とシャムとの最初の外交關係　W・ロェール（ハンブルク大學ドクトル論文）

奈良時代の税制　H・デットマー（ミュンヘン大學ドクトル論文）

考古學

權現山出土品と舊石器時代の問題　J・マリンガー（雑誌「アントロポス」一九五六年）

北日本の環狀列石と巨石遺跡について　H・メリヒァー（ウィーン大學ドクトル論文）

アイヌのチャシ　A・スラヴィク（雑誌「シューレ・デル・フェルカークンデ」一九五六）

民俗學

日本民俗學に於ける場の概念について　M・エーデル（雑誌「シューレ・デル・フェルカークンデ」一九五六）

日本における死者の靈と祖先の魂（雑誌「アントロポス」一九五六）

人形の祭　G・フーバー（雑誌「カトリック・ダイジェスト」九）

三つの猿の印（しるし）と庚申の日　A・ウェデマイア（ライプチヒ民俗博物館紀要一九五七）

宗教

中國における道元　O・ベンル（ドイツ東亞研究會紀要七九／八十）

日本における佛教　W・グンデルト

儒家の佛教えの關係について　O・クレスラー（ドイツ東洋學會雑誌八八）

日本における宗教と國家　H・ユンゲ（雑誌「新教月報」）

古代日本語における祈　A・レンマーヒルト（雑誌「モニュメンタ・ニッポニカ」一九五六）

古代日本語における呪　A・レンマーヒルト（雑誌「モニュメンタ・ニッポニカ」一九五六）

禪の精神　A・W・ウァツ（單行本　一四一頁）

言語

片假名と五十音圖の起源　E・パーゲル（ドイツ東洋學會雑誌九一）

國語改革に影響を及ぼす精神的變革　A・F・フィルマン（ウェデマイア教授祝賀論文集）

日本における文字の改革

日本語の言語構造の特長　H・ツァヘルト（ドイツ東亞研究會紀要七四）

日本語音聲學　一、二、三卷　P・ハルトマン（單行本一九五二年）

日本語における鼻音化した閉鎖音の問題　G・ヴェンク（單行本一九五四―一九五七）

日本語における活用の成立とその組織化について　G・ヴェンク（ヴェラー教授祝賀論文集）

萬葉假名「亞」について　G・ヴェンク（ドイツ東亞研究會紀要七六）

古代日本語における動詞の態（アスペクト）の問題　G・ヴェンク（ドイツ東亞研究會紀要七八）

日本語（口語）入門　B・レヴィーン（雜誌「極東」一九五五年）

日本語（文語）摘要　K・マイスナー（單行本一九五八年）

文學　B・レヴィーン（單行本一九五九年）

ドイツにおける日本學の現況

源氏物語における宿命觀　O・ベンル（ドイツ東亞研究會紀要七七）

業平の戀物語　O・ベンル（單行本）

十六世紀に至る迄の日本の詩歌の變遷　O・ベンル（單行本一九五一年）

連歌　O・ベンル（ドイツ東洋學會雜誌一〇四）

小林一茶の「おらが春」　G・S・ドンブラディ（ミュンヘン大學ドクトル論文）

駿臺句集序說　G・S・ドンブラディ

日本人の生活感情のあらわれとしての詩歌　W・ドナト（ドイツ東洋學會雜誌九六）

萬葉における天皇觀　H・スタイニガー（ウェデマイア教授祝賀論文集）

西鶴と德川時代の文學の展開　H・ツァヘルト（雜誌「東洋研究」）

正岡子規の俳論　M・フープリヒト（ハンブルク大學ドクトル論文）

萬葉研究によせて　A・ウェデマイア（ヴェラー教授祝賀論文集）

人麿呂の戀　A・ウェデマイア（ヴェラー教授祝賀論文集）

平曲　J・グラウビツ（ウェデマイア教授祝賀論文集）

昭和初期のプロレタリア文學　J・ベルント（ベルリン・フンボルト大學ドクトル論文）

横井也有の鶉衣　W・ナウマン（ドイツ東亞研究會紀要八一）

日本の詩歌における近代的潮流　A・ピーパー（雜誌「アクツェント」一九五七）

大正時代の生活感情のあらわれとしての詩　A・ピーパー（ドイツ東亞研究會紀要七七）

芭蕉の俳文　H・ハミッチ（雜誌「シノロジカ」一九五四）

卯辰紀行　H・ハミッチ（ウェデマイア教授祝賀論文集）

愚管抄における「道理」の概念について　H・ハミッチ（雜誌「極東」）

修業道　H・ハミッチ（雜誌「極東」）

社會、經濟

日本の平地面積と人口　M・シュヴィント（雜誌「海外展望」）

日本の挫折とその經濟的復興　M・シュヴィント（單行本一九五四年）

日本の敗戰　H・G・シュターマー（單行本一九五二年）

近代日本の極東における地位（雜誌「海外展望」）

日本における家庭　F・タッペ（ミュンスター社會科學研究所紀要）

天皇　W・ヘレンタール（雜誌「政治研究」）

新聞にあらわれた日本の民主主義　G・クナウス（雜誌「政治研究」）

日本の家族制度の現今　H・ウィクマン（雜誌「ゾチアレ・ヴェルト」）

教育制度の問題のある改革　St・J・クリメク

昭和三十二年夏より二年餘りの留學生活、ことにその後半において西獨ミュンスターで師事していた教授の厚意により、筆者の專門とする西アジアの言語、文化研究のかたわら當大學日本學研究室助手の任にあったため、ドイツにおける日本學、支那學の現況を多少見聞し、關係資料を若干集める機會に恵まれたのでそれらを基にして本稿を書いた次第である。

寄贈交換雜誌目錄

史學雜誌　六八—二～一二、　史學會
史　林　四二—二～六、四三—一　史學研究會
歷史地理　八九—二　日本歷史地理學會
日本上古史研究　三—三～一二　日本上古史研究會
史　泉　一五、一六・一七合併號　關西大學史學會
岩手史學研究　三〇、三一、三二　岩手史學會
立正史學　二三　立正史學會
日本歷史　一二八～一三八日本歷史學會
國史研究　一四、一五・一六合併號　一七、一八　弘前大學國史研究會
書陵部紀要　一〇、　宮内庁書陵部
佛教史學　七—四、八—一二合刊　佛教史學會
立命館文學　一六八～一七六　立命館大學人文學會
社會經濟史學　二四—五、六　二五—一～五　社會經濟史學會
史　淵　七七～七九　九州史學會
史　窓　一五　京都女子大學史學會
歷史評論　一〇二～一一二　民科歷史部會
史　潮　六七、六八　大塚史學會
駿臺史學　九　駿台史學會
歷史學研究　二二八～二三五　歷史學研究會
文　化　二三—一、二東北大學文學部
史　觀　五四・五五合冊、五六　早稲田大學史學會
古代學　七—二、三・四合併號　古代史協會
藝　林　一〇—二～六　藝　林　會
熊本史學　一五・一六合併號、一七、　熊本史學會
史　苑　二〇—一　立教大學史學會
九州史學　八～一二、　九州大學文學部國史研究室
史學研究　七一～七四　廣島史學研究會
Museum　三十四年四月～十二月　東京國立博物館
ヒストリア　二一～二四　大阪歷史學會
郷土よこはま　一三～一八　横濱市圖書館郷土資料室
史　海　六、　東京學藝大學史學會
愛知大學法經論集　二五
專修大學論集　一九、二〇
九州大學經濟學研究　二四—二～四
同志社大學資料目錄　五—四、六—一
日本大學史學會研究彙報　二
福島大學學藝學部論集　九—一　一〇—一
法政大學文學部紀要一
德島大學學藝紀要　八